

## 病害虫発生予察予報第13号（4月の予報）

佐賀県

### 目次

1. 4月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 4月の予報	
普通作物（麦、水稻）	3
果樹（カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	6
茶	10
野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、アスパラガス、タマネギ）	11
花き（キク）	20
5. 病害虫診断状況	23
6. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	24
7. <u>農薬の適正使用について</u>	25

### 今月のトピックス

気温の上昇に伴い、害虫が増殖しやすくなります。圃場の発生状況を確認の上、適期防除に努めましょう。

## 1. 4月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



タマネギベと病の越冬罹病株



オオオムギ網斑病



クロゲハナアザミウマによるキク葉裏の食害



チャのカンザワハダニ（成虫及び卵）

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部  
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088  
TEL (0952)45 - 8153 FAX (0952)45 - 5085

## 2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成27年3月25日 福岡管区気象台発表】

天気は数日の周期で変わるとでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

4月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	30	40
降水量	30	30	40

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の4月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報(確率予報)の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
4月の平均気温	15.0℃	-0.4℃ ~ +0.3℃
4月の降水量	156.2mm	91% ~ 110%

## 3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量(平年比)

○予報の発生量は平年(佐賀県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査圃場の写真を抜粋して掲載しています。

## 4. 4月の予報

### 普通作物

#### 【概要】

作物名	病虫害名	発生時期		発生量		病虫害防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比	平年比	前年比		
大麦	網斑病	—	—	並	並	136～137	赤かび病は平成27年3月26日付病虫害対策資料第24号参照
麦類	赤かび病	やや早い	やや早い	並	並	137～140	
	うどんこ病	—	—	並	並	140～141	
水稻	いもち病	—	—	多	多	133～142 145～151	
	ばか苗病	—	—	並	並	133～142	

#### 【特記事項】

##### 【ムギ】

1. 本年産麦の出穂期は、今後気温が平年並で経過すれば、平年よりやや早くなる見込みである。ただし、今後の気象や播種時期、麦種によって出穂期は異なるため、必ず各圃場毎に出穂状況を確認したうえで、赤かび病の適期防除に努める（詳細は、[平成27年3月26日付け病虫害対策資料第24号参照](#)）。
2. 近年、大麦の網斑病が多発生傾向にあるので、出穂期～穂揃い期に本病を対象とした薬剤防除を行う。

##### 【水稻】

1. 昨年、穂いもちの発生が多かったことから、菌密度が高まっていると考えられる。種籾の比重選とベノミル水和剤による種子消毒を徹底し、いもち病常発地帯では育苗期から防除を行う。

### 麦

（巡回調査日：3月16日～23日）



巡回調査時の生育状況（大麦） 巡回調査時の生育状況（小麦）

# 1. 赤かび病

## 1) 予報の内容

発生時期：平年よりやや早い（前年よりやや早い）

発生量：平年並（前年並）

## 2) 予報の根拠

### (1) 発生時期

平成26年11月下旬～12月下旬播きでは、節間伸長始期は大麥、小麦で平年並～やや早い。今後、気温が平年並で経過すれば、出穂期は平年よりやや早くなる見込みである（農業試験研究センター・県米麦改良協会：平成27号年3月20日付け麦づくり情報第4号）。

### (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

表 出穂期の平年及び前年値（県農業試験研究センター）

品種名	播種時期 注1)	出穂期 注2)	
		平年値 注3)	前年値
ニシノホシ	12月10日	4月13日	4月12日
	12月20日	4月16日	4月14日
サチホゴールド	12月10日	4月11日	4月11日
	12月20日	4月13日	4月12日
シロガネコムギ	11月20日	4月8日	4月9日
	12月10日	4月15日	4月16日

注1) 播種時期：毎年、11月20日、12月10日、20日前後に播種

注2) 出穂期：全莖数の40～50%が出穂した日

注3) ニシノホシは19年産からのため、19～26年産の平均。

サチホゴールドは、12月10日播種は23年産からのため、23～26年産の平均。

12月20日播種は24年産からのため、24～26年産の平均。

シロガネコムギ、ニシノホシの平年値は過去7ヶ年の内最高と最低を除いた5ヶ年の平均。

## 3) 防除上注意すべき事項

(1) 大麥における赤かび病の防除適期は、葯殻抽出始め（出穂期の約2週間後）である。

更に、その

7日後頃に2回目の散布を行うと効果が高まる。

(2) 小麦における赤かび病の防除適期は、開花期～開花最盛期（出穂期の約10～14日後）である。更に、その10から20日後に2回目の散布を行うと効果が高まる。

(3) 出穂期以降に高温（20～27℃）で、降雨が続く場合には多発することが予想されるため、防除対策をより一層徹底する。

(4) 詳細の防除対策については、[平成27年3月26日付病害虫対策資料第24号](#)を参照する。

# 2. 網斑病（大麥）

## 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

## 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生莖率3.3%（平年1.4%、前年0.4%）であり、平年よりやや多く前年より多い。

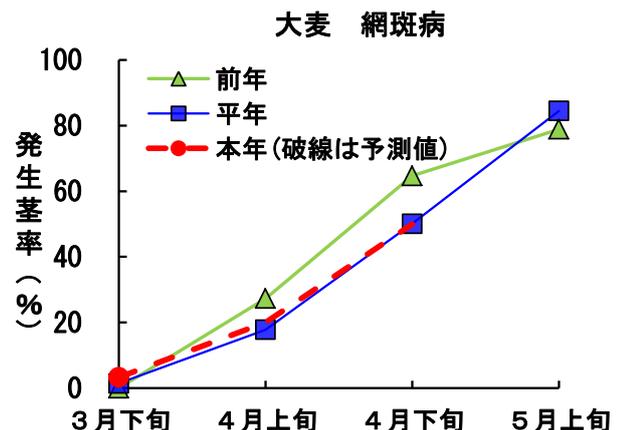
〈±～+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。

〈±〉

## 3) 防除上注意すべき事項

(1) 出穂期～穂揃い期に本病を対象とした薬剤防除を行う。



# 水稲

## 1. いもち病（苗いもち）

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 前年の穂いもちの発生状況

平成26年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稲（8月上旬）で1.7%（平年3.7%）、北部山間の早植え水稲（9月上旬）で20.8%（平年6.9%）、普通期水稲（10月上旬）で38.8%（平年5.9%）であり、早期は平年並、早植え、普通期は平年より多かった。〈+〉

#### (2) 水稲籾のいもち病菌保菌率

県内各地の巡回調査地点から採取した平成26年産籾のいもち病菌保菌率は、早期水稲で2.2%（平年1.4%）、早植え水稲で10.4%（平年1.0%）、普通期水稲のウルチ品種で3.6%（平年0.4%）、普通期水稲のモチ品種で0%（平年0.3%）であった。早植え、普通期ウルチ品種においては平年より高く、ここ十年で一番高く、菌密度が高いと考えられる。〈+〉

表 平成26年産水稲籾のいもち病菌保菌率

作 型	品 種	調査圃場数	保菌率	平年 (保菌率)
早期水稲	コシヒカリ	12 圃場	2.2 %	1.4 %
早植え水稲	ウルチ品種	16	10.4	1.0
普通期水稲	ウルチ品種	31	3.6	0.4
	モチ品種	10	0	0.3

注) 早期水稲、早植え水稲では各圃場ともに50粒の籾を、普通期水稲では各圃場ともに25粒の籾について保菌状況を調べた。

保菌率の平年は平成16～25年産の平均値。

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) いもち病常発地帯では種子更新を徹底する。
- (2) 比重選、ベノミル水和剤による種子消毒を徹底する。
- (3) 育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいので、覆土を適正に行う。
- (4) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。

## 2. ばか苗病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

- (1) 前年（平成26年度）の本病の発生は平年並であった。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 比重選、種子消毒を徹底する。

# 果 樹

## 【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	230～232	
	かいよう病	やや少	並	234～237	
	ミカンハダニ	並	並	259～263	
ナシ	黒星病	並	並	298～303	
ブドウ	黒とう病	並	並	340～342	
果樹全般	果樹カメムシ類	並	並	266～269	<a href="#">平成27年3月5日付病虫害対策資料第23号参照</a>

## 【特記事項】

- カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、展葉初期の防除を徹底する。
- ナシでの開花直前～落花期は黒星病対策の重要な時期にあたるので、防除を徹底する。特に、長雨等の天候不順の場合、DMI剤を追加散布する。
- キウイフルーツかいよう病の発生が県内で確認されている。本病の未発生園で乳白色あるいは赤褐色の樹液が漏出する等の症状が新たに見つかった場合は、すぐに関係機関へ連絡する（[平成27年1月20日付病虫害対策資料第19号参照](#)）。

## カンキツ

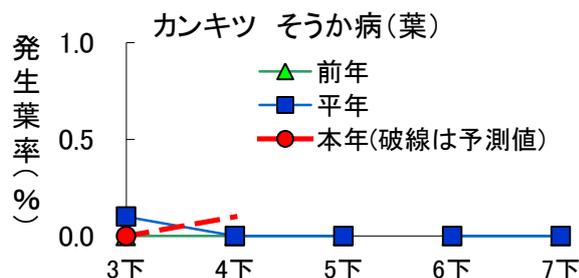
（巡回調査日：3月19日～23日）



巡回調査時の生育状況

### 1. そうか病

- 予報の内容  
発生量：平年並（前年並）
- 予報の根拠
  - 巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない。（発生葉率：平年0.1%、前年0%）〈－～±〉
  - 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 防除上注意すべき事項
  - 温州みかんでは、展葉初期（最も伸びた新梢が1cm程度）の防除を必ず実施する。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

## 2. かいよう病

### 1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや少ない**（前年並）

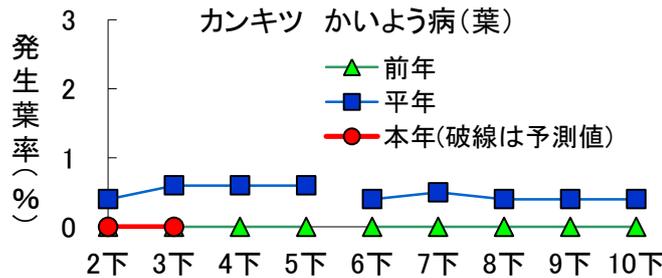
### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない。（発生葉率：平年0.6%、前年0%）〈-～±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、いよかん、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、展葉初期の防除を徹底する。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

## ナ シ

### 1. 黒星病

#### 1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年並）

#### 2) 予報の根拠

(1) 平成26年9月下旬の巡回調査では、発生葉率は0.8%（平年1.1%、前年0.8%）で、園内で越冬した菌密度は平年及び前年並と考えられる。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 開花直前～落弁期はナシの黒星病の重要防除時期にあたるので、薬剤散布の間隔が10日以上開かないように防除を徹底する。

(2) 降雨が続く場合は状況に応じてDMI剤の追加散布を行う。

## カメムシ類

### 1. カメムシ類

#### 1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年並）

#### 2) 予報の根拠

(1) 平成27年1月中～下旬に、県内22地点の常緑広葉樹林の林床から落葉を採集し、チャバナアオカメムシ成虫の越冬状況を調査した結果、平均越冬虫数は0.18頭/m<sup>2</sup>（平年0.34頭/m<sup>2</sup>、前年0.29頭/m<sup>2</sup>）、越冬地点率は31.8%（平年46.5%、前年36.4%）であり、越冬密度は平年及び前年並と推定される（表1）。

(2) 越冬状況調査の結果から、本年の5月～8月上旬における果樹園への果樹カメムシ類の飛来量は、平年及び前年並と予測される（図1、図2）。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類の飛来については、ナシ、ウメ、モモなどで特に注意する。
- (2) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一度飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪除する。
- (3) 越冬密度は地域によって異なるため、発生動向には注意する。
- (4) 今後のカメムシ類の発生量と果樹園への飛来予測時期については、農業技術防除センターが発表する各種情報及びホームページ (<http://www.pref.saga.lg.jp/web/boujo>) を参考にする。

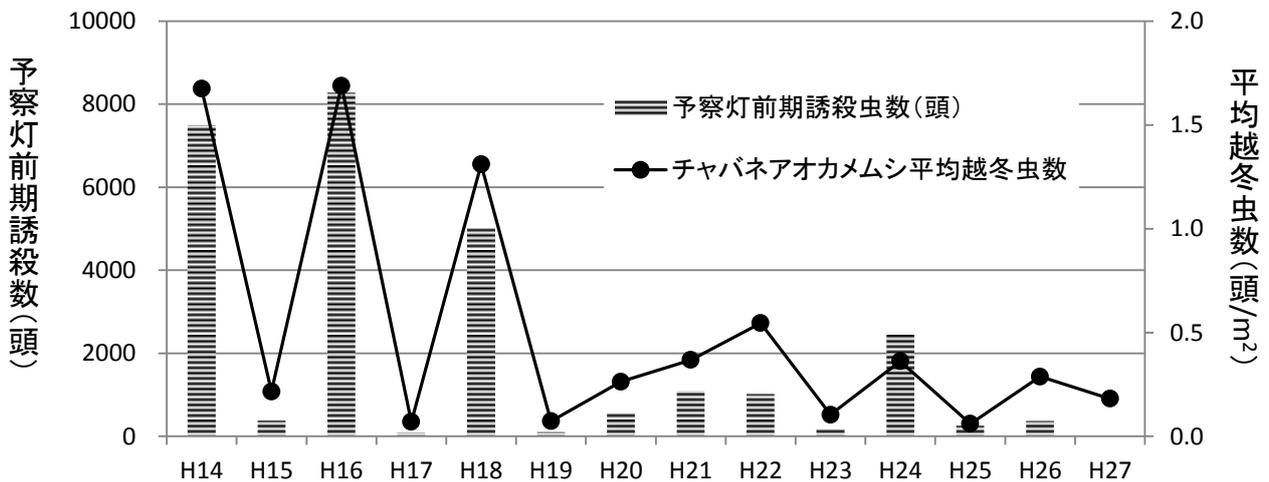


図1 チャバネアオカメムシ成虫の平均越冬虫数(頭/m<sup>2</sup>)及び予察灯前期誘殺虫数<sup>1)</sup>の年次推移。  
<sup>1)</sup> 県内に設置された予察灯3台による5月上旬～8月上旬の総誘殺虫数の平均値を示す

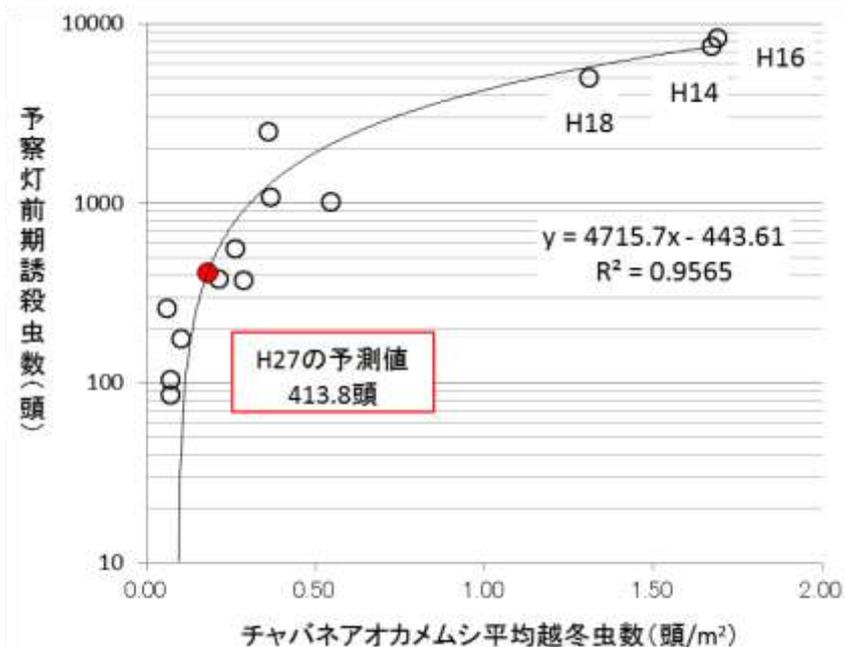


図2 チャバネアオカメムシ成虫の平均越冬虫数(頭/m<sup>2</sup>)と予察灯前期誘殺虫数<sup>1)</sup>との相関性。  
<sup>1)</sup> 県内に設置された予察灯3台による5月上旬～8月上旬の総誘殺虫数の平均値を示す  
 (○:平成15～26年の値 ●:回帰直線から予測される平成27年の値)。

表1 各調査地点におけるチャバネアオカメムシ成虫の平均越冬虫数<sup>1)</sup>及び越冬地点率の推移(平成17~27年).

No.	調査地域	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	平年
1	みやき町	-	-	0.3	0	0	3.0	0	0	0	0.3	<b>0</b>	0.45
2	吉野ヶ里町	0.2	1.7	0	1.0	1.0	0	0	0	0	0	<b>0</b>	0.39
3	神埼市	0.3	0	0	0.3	0.3	0	0.3	0.7	0	3.0	<b>1.7</b>	0.49
4	佐賀市	0	1.2	0	0.3	0.7	0.3	0	0	0	0	<b>0</b>	0.26
5	小城市	0	0.3	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0	0	<b>0.3</b>	0.12
6	多久市1	0	0.3	0.2	0.8	0.3	0.7	0	0	0	0	<b>0</b>	0.23
7	多久市2	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0.3	<b>0</b>	0.06
8	唐津市1	0	1.2	0	0	0	0	0.3	0	0	0.3	<b>0</b>	0.19
9	唐津市2	-	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0	<b>0</b>	0.05
10	唐津市3	-	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0	<b>0</b>	0.05
11	伊万里市1	0	2.2	0	0	0.3	0	0	0	0	0	<b>0.3</b>	0.25
12	伊万里市2	-	-	-	-	0.7	0.7	0	0.3	0	0.3	<b>0</b>	0.33
13	伊万里市3	-	-	-	-	1.3	0.7	0	1.0	0	1.0	<b>0</b>	0.66
14	武雄市1	0	3.3	0	0	0.3	0	0	1.3	0.3	0	<b>0</b>	0.52
15	武雄市2	-	-	-	-	0	0.3	0	0.3	0	0.7	<b>0</b>	0.22
16	鹿島市1	0.2	1.4	0	0	0.3	0.7	0	0.3	0	0	<b>0.3</b>	0.29
17	鹿島市2	-	-	-	-	0.3	0.7	0.3	0	0	0	<b>0</b>	0.22
18	鹿島市3	-	-	-	-	0.3	0.3	0	1.0	0.3	0	<b>0.3</b>	0.33
19	太良町1	0	1.5	0	0.1	0	0.7	0.3	0.7	0.3	0	<b>0</b>	0.36
20	太良町2	-	-	-	-	0.7	0.7	0.3	0.7	0.3	0.3	<b>0</b>	0.51
21	太良町3	-	-	-	-	0.7	2.3	0.7	1.0	0	0	<b>0.7</b>	0.78
22	太良町4	-	-	-	-	0	1.0	0	0.7	0	0	<b>0.3</b>	0.28
	平均越冬虫数	0.07	1.31	0.07	0.26	0.37	0.55	0.10	0.36	0.06	0.29	<b>0.18</b>	0.34
	越冬地点率(%)	30.0	90.0	27.3	54.5	72.7	59.1	27.3	50.0	18.2	36.4	<b>31.8</b>	46.5
	備考	↑前期多発年(H18)										(前年)	(本年)

<sup>1)</sup>各地点1m<sup>2</sup>あたりの虫数

# 茶

## 【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		<a href="#">病害虫防除のてびきの記載ページ</a>	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	418～419	

## 【特記事項】

1. カンザワハダニは、萌芽前からの防除を徹底する。

### 茶

(巡回調査：3月19～20日)



巡回調査時の生育状況

## 1. カンザワハダニ

### 1) 予報の内容

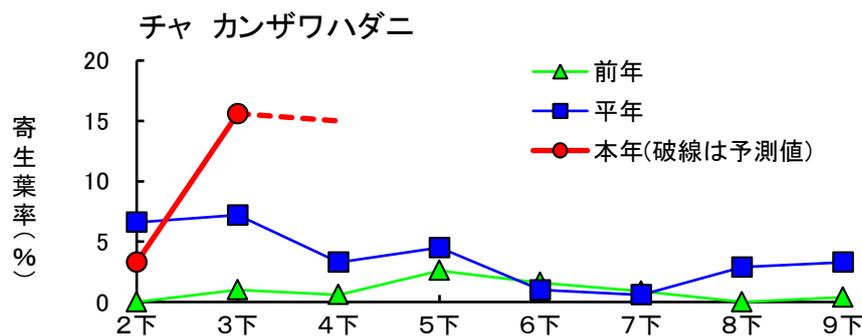
発生量：平年より多い（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生葉率は15.6%（平年7.2%、前年1.0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。



# 野 菜

## 【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや多	やや多	188～191	<a href="#">平成27年2月26日付 病害虫発生予察注 意報第9号参照</a>
	灰色かび病	並	やや少	191～193	
	ハダニ類	多	多	199～200	<a href="#">平成27年3月9日付 病害虫発生予察注 意報第10号参照</a>
	アブラムシ類	並	並	204～205	
ナス	すすかび病	並	並	234～235	
	灰色かび病	並	並	232～234	
	アザミウマ類	やや少	並	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	やや少	並	246	
キュウリ	べと病	並	やや少	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	灰色かび病	並	並	168～169	
	褐斑病	やや少	やや少	170～172	
	アザミウマ類	並	並	148～149、183～184	
	コナジラミ類	並	並	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	並	並	210～212	
	葉かび病	並	並	216～217	
	コナジラミ類	多	やや多	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	並	並	154～155、223	
アスパラ ガス	アザミウマ類	並	並	301～302	
	アブラムシ類	並	並	303	
タマネギ	べと病	多	並	273～275	<a href="#">平成27年2月26日付 病害虫発生予察注 意報第8号参照</a>
	ボトリチス葉枯症	並	並	275	
	ネギアザミウマ	やや少	並	280～281	

## 【特記事項】

### 【イチゴ】

1. うどんこ病の発生圃場では、発病果実等を除去し、硫黄粒剤のくん煙処理を併用するなどして防除を徹底する。薬剤防除の際は、葉裏や株の内部にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する（[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第9号](#)）。また、苗での伝染源となるため、親株の防除も徹底する。

2. ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う（[平成27年3月9日付病害虫発生予察注意報第10号参照](#)）。

3. イチゴ立枯症は、感染親株が伝染源となり、苗での発病につながるため、親株のランナー発生前からの防除を徹底する。

#### 【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、低密度時からの防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病・退緑黄化病等のウイルス病の発生がみられる場合には、伝染源となる発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。

2. 今後、暖房機の稼働時間が短くなるため、施設内が多湿条件となり、灰色かび病等の病害が発生しやすくなる。このため、こまめな換気や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理を行い、結露時間の短縮に努めるとともに、少発生時から薬剤防除を定期的に行う。

#### 【タマネギ】

1. タマネギベと病越年罹病株の発生が多い。圃場毎に発生状況を調査し、越年罹病株の抜き取りの徹底と発生初期からの速やかな薬剤散布を徹底する。（[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第8号参照](#)）

2. タマネギボトリチス葉枯症については、曇天・雨天が続いた後に薬剤防除を実施する。

## イチゴ（本圃）

（巡回調査：3月16日～23日）



巡回調査時の生育状況

### 1. うどんこ病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

#### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は5.0%（平年5.1%、前年2.0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(2)今作では、育苗期から本圃初期に本病の発生が多く推移したため、圃場内での菌密度は高いと思われる。〈+〉

(3)病害虫防除員の調査(6圃場)では、5圃場で発生がみられ、発生株率は7.0%である。〈±~+〉

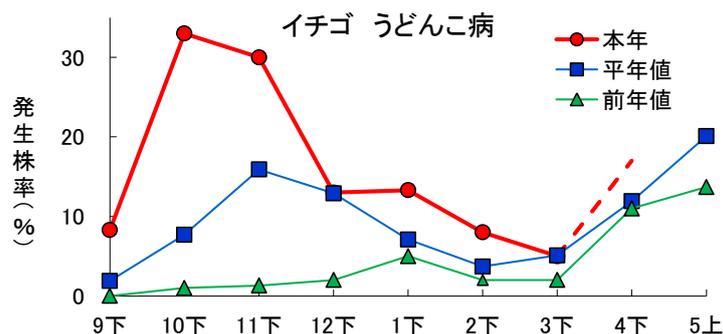
(4)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1)葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3)詳細な防除対策は[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第9号](#)を参照する。



## 2. ハダニ類

### 1) 予報の内容

発生量：**平年より多い**（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は31.3%（平年18.9%、前年10.7%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～＋〉

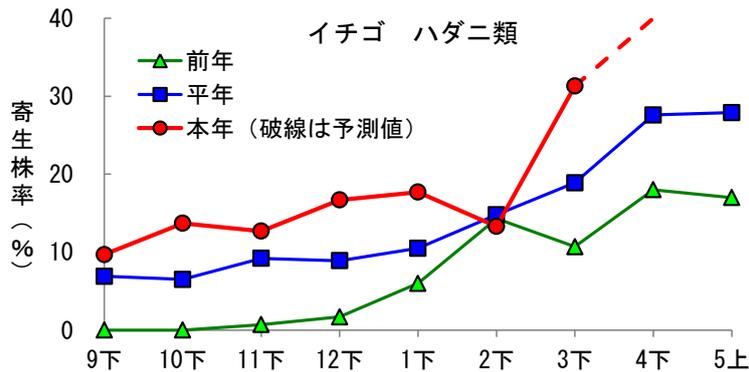
(2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、6圃場とも寄生が見られ、寄生株率は13.3%である。〈－～±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は[平成27年3月9日付病害虫発生予察注意報第10号](#)を参照する。



## ナス（促成）

（巡回調査：3月19～23日）

### 1. すずかび病

#### 1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年並）

#### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は25.6%（平年31.4%、前年30.0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、4圃場で発生が見られ、発生株率は19.2%である。〈－～±〉

(3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

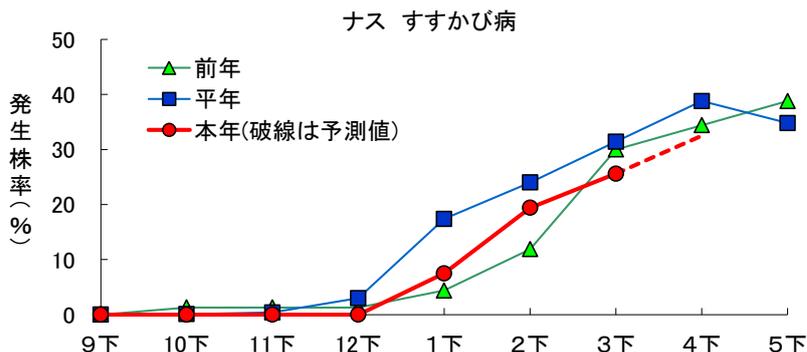
#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 少発生時からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



巡回調査時の生育状況



## 2. 灰色かび病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

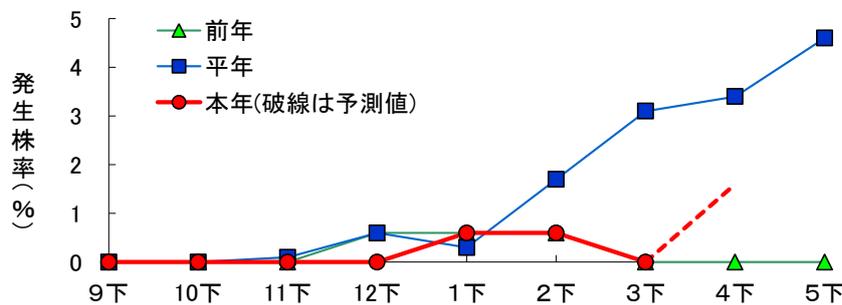
### 2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年3.1%、前年0%）。〈-~±〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、5圃場で発生が見られ、発生株率は10.0%である。〈+〉
- (3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (2) 発病部位は除去し、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス 灰色かび病



## 3. アザミウマ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

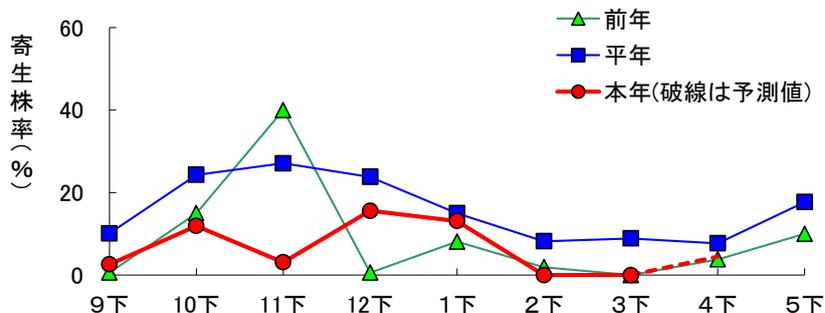
### 2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年8.9%、前年0%）。〈-〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、2圃場で発生が見られ、寄生株率は3.3%である。〈-~±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



## 4. コナジラミ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は1.9%（平年16.0%、前年3.8%）であり、平年より少なく前年並である。〈-〉

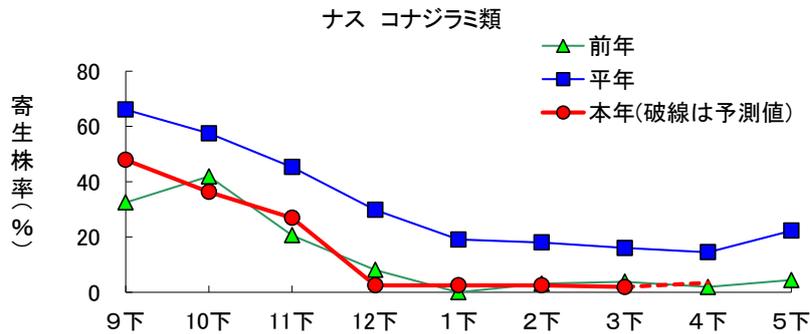
(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で発生が見られ、寄生株率は1.7%である。〈-〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1)施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。

(2)葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## キュウリ(半促成)

(巡回調査：3月16～23日)



巡回調査時の生育状況

### 1. ベと病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

#### 2) 予報の根拠

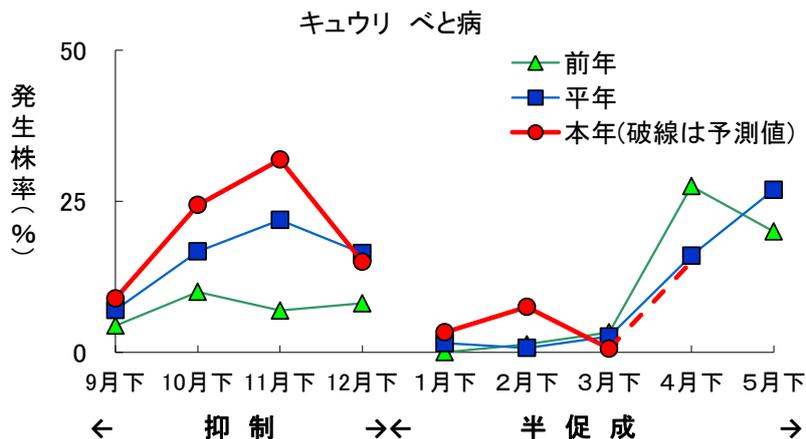
(1)巡回調査では、発生株率は0.6%（平年2.6%、前年3.3%）であり、平年並で前年よりやや少ない。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## 2. アザミウマ類

### 1) 予報の内容

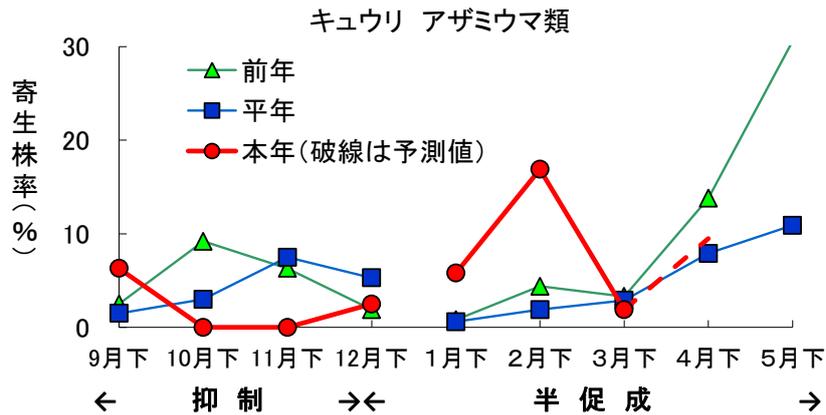
発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は1.9%（平年2.9%、前年3.3%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## トマト

（巡回調査：3月16～23日）



巡回調査時の生育状況

## 1. 灰色かび病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

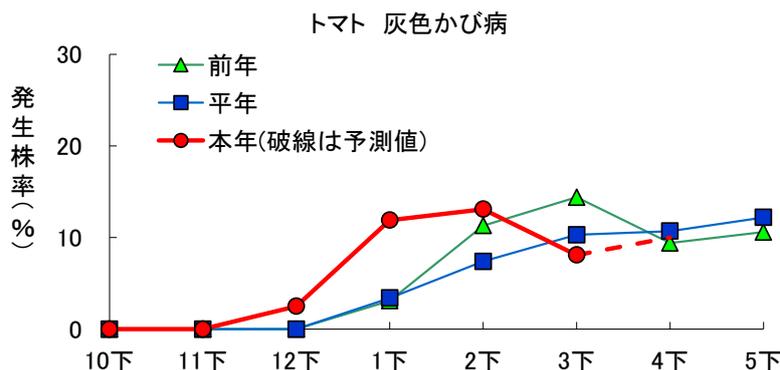
(1)巡回調査では、発生株率は8.1%（平年10.3%、前年14.4%）であり、平年並で前年よりやや少ない。〈±〉

(2)病害虫防除員の調査（4圃場）では、4圃場で発生が見られ、発生株率は10.0%である。〈±〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。
- (2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## 2. コナジラミ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は6.3%（平年2.0%、前年0.6%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

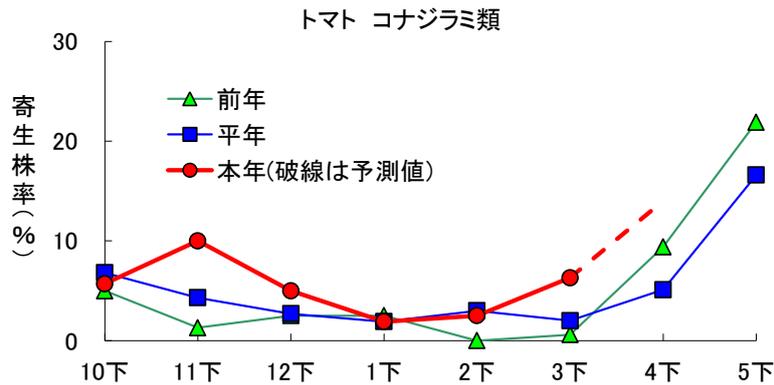
(2)病害虫防除員の調査（4圃場）では、3圃場で寄生が見られ、寄生株率は11.3%である。〈+〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1)コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底する。

(2)幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## タマネギ（本圃）

（巡回調査日：3月17日）



巡回調査時の生育状況（マルチ栽培）



巡回調査時の生育状況（露地）

## 1. ベと病

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、越年罹病株のみの発生が認められ、発生株率は0.5%（平年0.3%、前年0.2%）であり、平年及び前年並であった。〈+〉

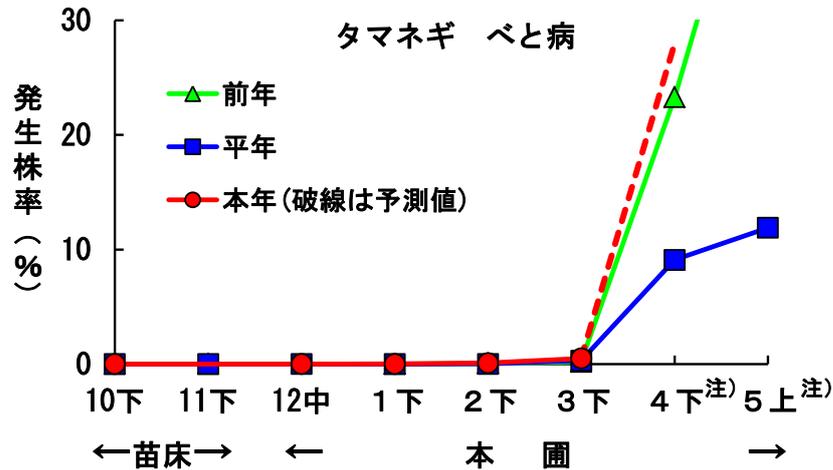
(2)特に、露地栽培（中生・晩生）において発生圃場率が75.0%と高く、一部で多発生圃場が見られている（表1）。〈+〉

(3)近年、べと病が多発していることから、前年度に発生した圃場を中心に病原菌の密度が高まっていると考えられる。〈+〉

(4)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は、圃場毎に大きく異なっているため、圃場毎に発生状況を調査し、発生初期からの速やかな薬剤散布を徹底する。
- (2) 薬剤散布後でも、曇雨天が続くと新たな病斑を形成することがあるので、このような場合は追加防除を実施する。
- (3) 薬剤が葉に十分付着するよう、十分量を丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (4) 早生タマネギで早期に発生したべと病が、周辺のタマネギの感染源となる場合があるので、防除対策には地域全体で取り組む。
- (5) 防除対策の詳細は、平成27年2月26日付け病害虫発生予察注意報第8号を参照する。



注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

表1 タマネギ巡回調査におけるべと病の発生状況(各圃場2,000株調査)

調査年月日	各調査圃場(a~p)におけるべと病の発生株率(%)															
	マルチ被覆(早生)圃場								露地(中・晩生)圃場							
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
平成27年1月26日	0.10	0	0	0	0	0	0	0	0.05	0	0	0	0	0	0	0
平成27年2月4日	0.30	0.05	0	0	0	0	0	0	0.05	0.25	0.25	0	0	0	0	0
平成27年2月18日	0.40	0.05	0.25	0	0	0	0	0	0.35	0.25	0.25	0	0	0	0	0
平成27年3月5日	1.00	0.10	0.15	0	0	0	0	0	0.65	1.15	0.30	0.30	0	0	0	0
平成27年3月23日	1.10	0.30	0.25	0	0	0	0	0	1.45	2.00	1.10	1.35	0.25	0.05	0	0

注) 1月26日から3月23日は、それぞれ同一圃場(a~p)を調査

## 2. ボトリチス葉枯症

### 1) 予報の内容

発生量：平年並(前年並)

### 2) 予報の根拠

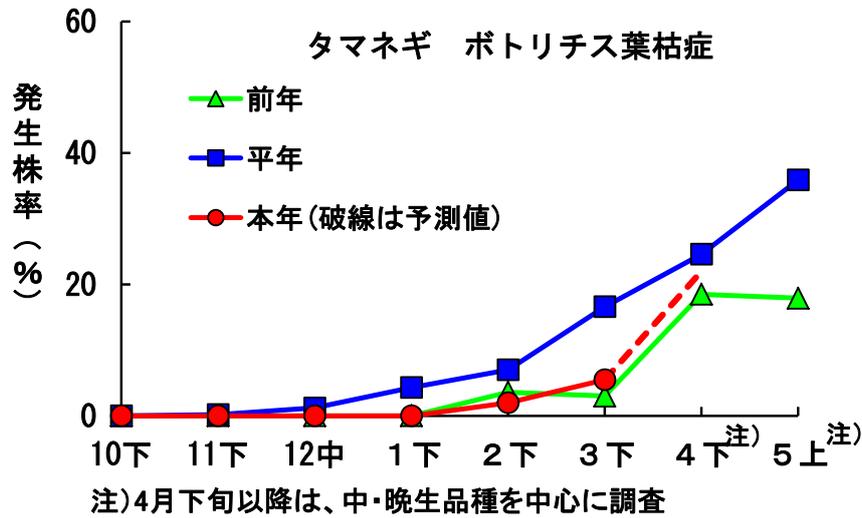
(1) 巡回調査では、発生株率は5.5%(平年16.6%、前年3.0%)であり、平年よりやや少なくて前年並であるが、一部で多発生圃場が見られている。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 曇天・雨天が続いた後には、薬剤防除を実施する。

(2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤を連用しない。



### 3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

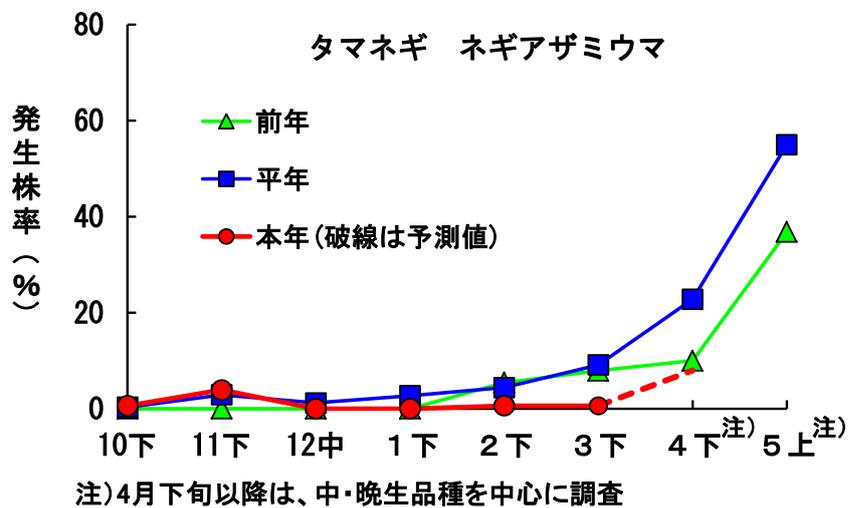
発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は0.6%（平年9.1%、前年7.9%）であり、平年及び前年よりやや少ない。（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1)本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2)薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤を連用しない。



# 花き

## 【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		<a href="#">病害虫防除の てびきの記載 ページ</a>	備考
		平年比	前年比		
キク (4～5月 出荷タイプ)	白さび病	並	並	343～344	
	アザミウマ類	やや多	多	348～350	
	アブラムシ類	並	並	346～347	
	ハダニ類	やや少	並	347～348	
	ハモグリバエ類	やや少	並	351	

## 【特記事項】

1. 白さび病は発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な散布による予防防除を行う。また、施設内が多湿にならないように換気に努める。
2. アザミウマ類はキクえそ病、茎えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。また、伝染源となるこれらのウイルス病発生株は抜き取り、圃場外で適切に処分する。
3. クロゲハナアザミウマによる被害は、ハダニ類による被害（葉裏のかすり症状）に類似するため、葉裏をよく観察して防除薬剤を選択する。薬液は葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
4. ハダニ類は、今後気温の上昇とともに増加するため、低密度時からの防除を徹底する。

## キク

(巡回調査：3月19～23日)

### 1. 白さび病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

#### 2) 予報の根拠

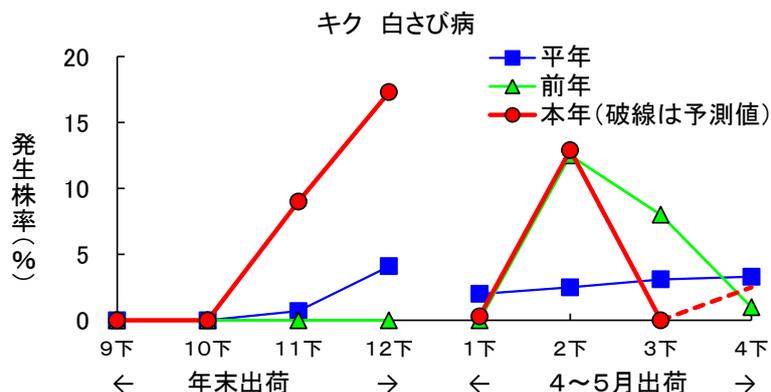
- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年3.1%、前年8.0%）。〈－～±〉
- (2) 気象予報では並発生条件となっている。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病してからでは防除が困難となるため、予防散布に努める。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。
- (3) 施設内が多湿にならないように換気を図る。



巡回調査時の生育状況



## 2. アザミウマ類 (ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ)

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

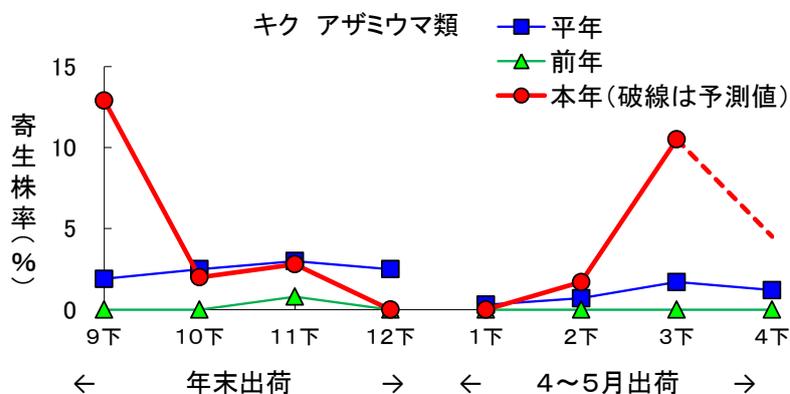
### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は10.5%（平年1.7%、前年0%）であり、平年及び前年より多いが、多発生圃場は一部に限られる。（±～+）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期からの防除を徹底する。

(2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。



## 3. ハダニ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

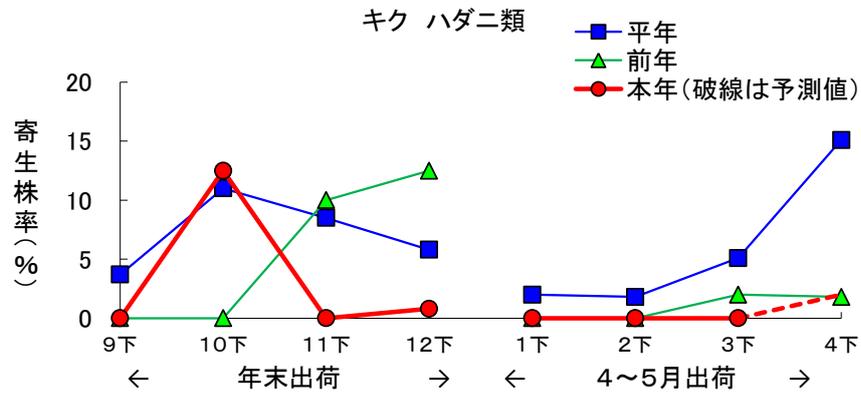
### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年5.1%、前年2.0%）（-～±）。

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## 4. ハモグリバエ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

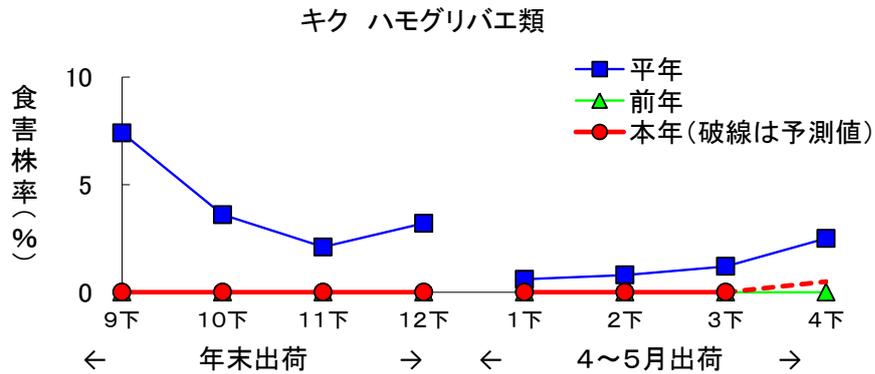
### 2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、食害を認めていない（食害株率：平年1.2%、前年0%）。〈-~±〉

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 早期発見に努め、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



## 5. 病害虫等診断依頼状況

平成27年2月21日～3月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名		依頼件数	診断結果(件数)
果樹	カンキツ	1	生理障害等(1)
	<b>計</b>	<b>1</b>	
野菜	アスパラガス	3	疫病(1)、生理障害等(2)
	イチゴ	1	生理障害等(1)
	キュウリ	4	つる枯病(1)、べと病(1)、生理障害等(2)
	タカナ	1	白斑病(1)
	タマネギ	9	腐敗病(1)、灰色腐敗病(1)、黒腐菌核病(1)、生理障害等(6)
	ナス	1	半身萎凋病(1)
	ネギ	1	灰色かび病(1)
	ピーマン	1	モザイク病(1)
	ホウレンソウ	1	斑点病(1)
	レタス	1	生理障害等(1)
	<b>計</b>	<b>23</b>	
花き	キク	2	えそ病(1)、生理障害等(1)
	スターチス	1	灰色かび病(1)
	トルコギキョウ	1	根腐病(1)
	バーベナ	1	生理障害等(1)
	ラナンキュラス	1	菌核病(1)
	<b>計</b>	<b>6</b>	

**合計： 16 作物  
30 件**

内訳	糸状菌による病害	: 13件
	細菌による病害	: 1件
	ウイルス・ウイロイドによる病害	: 2件
	害虫類	: 0件
	線虫類	: 0件
	生理障害等	: 14件
	<b>合計</b>	<b>30件</b>

## 6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に2月23日～3月23日までに発表されたもの

警報・注意報(重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表)

発信元	内容	日付	作物	病害虫名
香川県	注意報	2015/02/25	ニンニク	春腐病
佐賀県	注意報	2015/02/26	イチゴ	うどんこ病
佐賀県	注意報	2015/02/26	タマネギ	べと病
佐賀県	注意報	2015/03/09	イチゴ	ハダニ類
神奈川県	注意報	2015/03/13	水稲	イネ縞葉枯病
大分県	注意報	2015/03/19	白ネギ	べと病
徳島県	注意報	2015/03/23	ハウレンソウ	べと病

注:太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報(新たな病害虫が発生した時などに発表される)

発信元	日付	作物	内容
大分県	2015/03/01	トルコギキョウ	茎えそ病(CSNV)
愛知県	2015/03/02	キュウリ	退緑黄化病(CCYV)
愛知県	2015/03/02	シソ	シソモザイク病(仮称)(PMoV)
沖縄県	2015/03/13	ウコン	青枯病
熊本県	2015/03/23	トマト	茎えそ病(CSNV)

注:太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等(九州地方で発表されたもののみ)

発信元	日付	作物	内容
熊本県	2015/02/26	果樹	チャバネアオカメムシの越冬調査について
宮崎県	2015/02/27	冬春いちご	ハダニ類の防除の徹底について
長崎県	2015/03/04	果樹	果樹カメムシ類の越冬量について
熊本県	2015/03/04	水稲	ヒメトビウンカの薬剤感受性結果について
佐賀県	2015/03/05	果樹	果樹カメムシ類の越冬状況について

注:太字は佐賀県で発表されたものを示す

## 7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬の散布前および散布後には、以下に  
気をつけて農薬事故を未然に防ぎましょう！

### 農薬を散布する前に注意すること

◎ ラベルをよく読んで、対象作物や散布時期を確認しておきましょう。

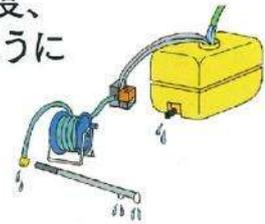
➡ 事前に確認することで、農薬の使用方法等の誤りを防止できます。



◎ 散布に使用する器具のチェックを行いましょう。

➡ 器具の不具合による農薬の事故を未然に防げます。

◎ 農薬の調整前には、事前に使用する農薬の散布濃度、散布面積等を確認し、必要量を調べて、余らないように調整しましょう。



### 農薬の散布後に注意すること

◎ 残った希釈液は河川、湖沼、用水路、下水等の水系に廃棄しないようにしましょう。

➡ 農薬が河川に流入し、魚などの水産動植物に思わぬ影響を及ぼす恐れがあります。

◎ タンクやホースは洗い残しがないようきれいに洗っておきましょう。

➡ 前回使用した農薬をタンクやホース内に残したまま、別の作物に使用すると国が定めた基準値を超過する恐れがあります。

◎ 残った農薬による誤飲、誤用等を避けるため、他の容器（飲料用ペットボトル等）への移し替えは絶対に止めましょう。

➡ 移し替えた農薬を、誤って使用したり、誤飲する事故が発生しています。



◎ 盗難を防止するため、農薬の保管庫にはカギをかけましょう。

ペットボトルに  
移し替えんごとね！



（佐賀県・佐賀県植物防疫協会作成パンフレットから抜粋）